

は全般に症状は軽微であった。

## 5. まとめ

3年間の試験結果から、以下のことが明らかとなった。

- ・ 薬剤が重複散布される場所では、水稻に対し強い薬害症状が発現する可能性がある。特に移植前に散布された場合には、より症状が強くなる傾向がある。

- ・ 供試薬剤により薬害症状の程度は異なるが、薬害が発現しやすい条件は同じ傾向がみられる。
- ・ 薬剤処理時（移植時）の水深が異なっても、薬害程度には大きな差異は無い。
- ・ 地域や土壌条件により薬害症状の程度は異なるが、薬害が発現しやすい条件は同じ傾向がみられる。
- ・ 実機（田植機、薬剤散布機）を用いた田植同時散布試験の結果は、

モデル区試験の結果を反映する傾向が認められる。

以上のことから、ここで検討した田植同時散布モデル区による試験は田植同時散布の実場面での薬剤ごとの薬害発生リスクを再現し、評価可能な試験方法である。今後、植調協会では田植同時散布モデル区による試験を田植同時散布作用性試験と位置づけ、実現場における薬害発生リスクの把握、評価に活用していきたい。

### 統計データから

## 農業支援サービスに関する調査結果（令和3年度）その2

農業者が農業に関して入手している情報（データ）では、営農類型にかかわらず最も多いのが、温度や降水確率などの気象情報で90%近く占める。次いで、栽培技術や病害虫診断など営農情報が約60%を占める。入荷量や販売価格など市況情報は露地野菜、施設野菜では60～70%と特に高い。また、土壌分析情報は施設野菜が50%と特に高い（表-1）。

また、情報の入手にスマートフォンやパソコン等を活用している割合が約70%に上るのに対して、表-2に示す営農データ

の管理の方法については、各営農類型ともノートに記録が60～70%と最も高く、エクセルやワード等での管理は約15%、営農管理システム（ソフト）の活用は2～4%に止まり、デジタル化は遅れていると言える。

営農管理ソフトを活用する意向がない理由として、現在の方法で十分が50～60%、使い方が難しそうが約25%を占めている。（K.O）

表-1 入手している農業に関する情報（複数回答）

営農類型	回答者数	気象（温度や降水確率など）	市況（入荷量や販売価格など）	土壌分析情報（水はけや窒素量など）	営農情報（栽培技術や病害虫診断など）	その他
	人	%	%	%	%	%
水田作	2,950	85.7	32.5	23.0	66.2	0.8
畑作	432	90.0	36.6	39.4	60.4	0.7
露地野菜	1,106	88.2	67.6	39.1	55.7	0.7
施設野菜	1,169	87.3	69.7	50.9	60.7	1.1
果樹	899	89.1	50.5	25.6	64.3	1.3

表-2 営農データの管理の方法

営農類型	回答者数	営農管理システムを活用	エクセルやワード等自らの様式で管理	生育状況等を写真に撮って保存	ノートに記録（営農日誌等）	農協等が一括して管理
	人	%	%	%	%	%
水田作	4,786	3.8	15.9	1.5	62.3	9.9
畑作	634	2.2	15.5	2.4	62.6	10.9
露地野菜	1,461	2.3	13.9	2.2	65.9	7.6
施設野菜	1,469	2.2	13.5	2.8	66.0	9.4
果樹	1,208	2.1	12.0	1.4	70.5	10.1

「食料・農林水産業・農山漁村に関する意識・意向調査 農業支援サービスに関する意識・意向調査結果」（農林水産省）